

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：18001

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12959

研究課題名(和文)エンブリーの見た須恵村の復原 - 空間・時間的分析 -

研究課題名(英文)The restoration of Suye mura : The analysis from spatial and historical perspectives.

研究代表者

神谷 智昭 (KAMIYA, Tomoaki)

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：90530220

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は人類学者ジョン・エンブリーが遺した写真資料を分析することで、エンブリー調査当時(1935-1936)の須恵村の姿をより詳細に復原することを目的におこなわれた。3年間の現地調査を通じて、写真が撮られた場所の同定や、写真の中に写っている物や事、以前の須恵村の生活の様子について、現在でも聞き取りが可能であることが判明した。その結果、エンブリー調査当時の須恵村の姿をより詳細に復原するための基礎資料を集めることにも成功した。

一方で、昔の須恵村を知る住民が少なくなっているため、至急調査をおこなうことや若い世代に故郷の文化を継承していくことの必要性が新たな課題として浮かび上がった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is restoring what John f. Embree as an anthropologist had seen in Suye village (1935-1936) more in detail by analyzing the photos Embree had shot. There are a lot of photos(more than 1600 pieces) but these are not opened to the public yet. By field work in this study for three years, it became clear that identifying where the photo was shot at, hearing about what was in photos and about the life of past peoples at Suye village are possible even nowadays. We got many essential data for accomplishing the purpose of this study successfully.

Meanwhile we got new problems. There is only a little time for hearing by using the photos because the residents who know the life of past peoples at Suye village is decreasing for their aging every year. And it is essential to create a method to take over their native land culture from the old to the young.

研究分野：文化人類学

キーワード：エンブリー 須恵村 映像人類学 古写真 日本近世史 歴史教育 人類学史

1. 研究開始当初の背景

人類学の分野においては、1980年代以降、写真の資料的価値に関する見直しが進んできた。すなわち、それまで「押絵」としてテキストに従属するモノとして扱われてきた写真から、話者とのラポールを築く媒介物としての写真、あるいは撮影者が意図しない情報も含んだ記録物としての写真という位置づけの変化である。その一方で、既存の写真資料の再解釈や未公開資料の発掘・分析は進んでいない。

2. 研究の目的

『Suye mura:a Japanese village』[J.F.Embree 1939]は、外国の人類学者が初めて日本の農村社会の生活を直接的に実態調査して記述した、社会人類学の記念碑的作品である。エンブリーは本作執筆のため、妻・エラとともに1935～1936年の1年間須恵村に住み込みながら調査を行い、1600枚以上にのぼる写真を撮影した。写真は『Suye mura』ならびに『The Women of Sue-Mura 1935-36』[Smith, Robert J. and Ella Lury Wiswell 1982]に掲載されたが、それらはごく一部であり、殆どは未公開となっている。本研究では、映像人類学の方法と歴史学の方法を併用しながらエンブリー写真資料を分析することで、エンブリーの見た当時の須恵村の姿を復原することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、熊本県あさぎり町(旧須恵村)教育委員会が保存しているエンブリーの未公開写真と、江戸時代にこの地を支配した肥後人吉藩相良家の史料である相良文書を素材に、聞き取り調査と史料分析を行う。それにより、a.住民の記憶をもとに写真に記録されている未知の情報を発掘する、b.史料分析を通じて得られた情報をもとに『須恵村』の内容を再検討する、c.写真の撮られた場所の同定とその後の変化を跡づける、以上の3点に焦点を絞り、基礎的データを可能な限り収集する。

4. 研究成果

(1)2015年度

2015年度は、研究代表者の神谷を中心に、学生とともにあさぎり町須恵地区(旧須恵村)において現地調査をおこなった。

実際の現地調査に先立ち、2015年4月～8月の中に、十数回にわたり事前学習をおこなった。まず神谷より、エンブリーの業績や人類学史上における『須恵村』の位置付けについて解説した後、本調査の全体像と意義について説明をおこない、問題意識の共有を図った。それから基礎文献として『須恵村』と『須恵村の女たち』『変貌する須恵村』の読み合わせをおこなった。こうして現地調査に臨むに際して最低限必要な知識を学習した上で、次の作業に進んだ。

本研究の遂行のため、事前にあさぎり町教育委員会からエンブリー写真資料のデジタルデータを貸与いただいた。その写真資料(1594枚)全てを印刷し、全員で印刷した写真資料を一通り閲覧した。『須恵村』や『須恵村の女たち』に掲載されている写真はエンブリー写真資料のごく一部であり、印刷した写真資料を見ることを通じて、エンブリー調査当時の須恵村の様子がより生き生きとイメージできる。その後、各人が気になった写真を5枚ずつ選び出させ、それぞれの写真について、疑問に思った事・物などを書き出し整理した。

現地調査は平成27年9月13日～平成27年9月18日の6日間にわたって実施した。

まず最初に全員で現在の須恵村(現あさぎり町須恵地区)の状況を確認することから始めた。エンブリーは須恵村内の各区を、水田型部落(中島、川瀬)、丘陵部落(上手、今村)、商店部落(覚井、頓所)、山の部落(平山)、新部落(湯ノ原)の5つに分類している[エンブリー 1978:37-40]。著作の中では地勢や自然環境、外部社会とのアクセスの違いによる、各部落の生業や生活の違いや村内での位置づけが描かれている。エンブリーの調査から80年近くが経過した時点において、エンブリーの記述からどの程度須恵村が変わり、あるいはどこが変わっていないか把握することが最初の課題であった。それと並行して、印刷した写真資料を参照しながら、写真が撮影された場所を可能な限り特定することも試みた。

最初に向かったのは覚井である。「商店部落」に分類されていることから分かるように、エンブリー調査当時から覚井には売店や酒屋などが集まっていた、須恵村の中でも繁華な場所であった。旧須恵村役場があったのも覚井である。エンブリーはここで家族とともに一軒家に住みながら調査をおこなった。現在、かつてエンブリーの住んだ家のあった場所には記念碑が建てられている。エンブリー写真資料では、エンブリーの住んだ家の周囲にも耕作地が広がっているが、現在は1つもなく、舗装された道路と宅地となっている。記念碑のすぐ近くには、相良三十三観音の二十番札所である覚井観音のお堂がある。エンブリー写真資料と照らし合わせると、観音堂の位置が変わっていることに気づくが、これは昭和50年頃に県道の拡張工事のために移動させた結果とのことである。現在でも春・秋の彼岸には住民が中心となって、参拝者にお茶や料理の接待をおこなっている。

観音堂から南側に集落内の登り坂を歩いて行くと、エンブリーが「須恵村に正規の寺院は、了玄院という曹洞宗の寺が、一つあるだけである」[エンブリー 1978:195]と書いた禅寺にたどり着く。境内の片隅には「沖縄疎開者記念」と刻まれた小さな碑があり、これによって戦時中に沖縄県出身者(特に宮古出身者)が当寺院に疎開していたことを知

るに至った。沖縄と須恵村を繋ぐ重要な発見であり、沖縄の人々の視点を通じて見た当時の須恵村、須恵村の人々の視点を通じて見た当時の沖縄の人々という双方向からの須恵村・沖縄像を掘り取る、新たなコンタクト・ゾーン研究を拓く課題が得られた。

了玄院の石段を下って南西方向に歩いて行くと、球磨川の川岸へ続く小道に出る。以前はこの川岸から対岸の川瀬まで渡船が出ていたそうである。調査時にも小舟が一艘係留されていたが、これは川漁用の舟であろう。川岸へ続く小道の側には舟場稲荷神社の小さなお堂が建っている。この稲荷神社はエンブリー滞在時から存在しており、エンブリー写真資料にも往時の姿が映っていたり、『須恵村』にも関連する記述がある〔エンブリー 1978 : 211-212〕。エンブリーは滞在時にお堂の建て替えに寄付したらしく、現在でも堂内に設置された寄付者銘板には「金拾圓 ジョン・エンブリー殿」と書かれているのが確認できる。稲荷神社調査中には、住民の方に話を伺う機会も得られた。Aさん(女性、)は、Aさんは他集落出身で、覚井には結婚を機に移り住んだという。Aさんが嫁いできた頃は、現在人家が建っている場所も田畑が広がり、現在とは村内の景観も全く違っていったという。またAさんは幼い頃に、エンブリーの娘クレアにも会ったことがあるということだった。今後の聞き取り調査においてキーインフォーマントになりうるだろう。

次に覚井から球磨川を挟んだ場所にある川瀬を訪れた。川瀬は「水田型部落」に区分されており、全体的に平坦な地勢に家々が塊状に建ち、その周囲に水田が広がるという、覚井とは異なる景観をもつ。エンブリー調査当時すでに「一戸あたりの人口が比較的に大きく、裕福」であったとされている〔エンブリー 1978 : 37〕。球磨川側の道路脇には、町の指定有形民俗文化財に指定されている、川瀬の庚申塔が立っている。川瀬の庚申塔はエンブリー写真資料にも写っているが、それを見ると、当時は庚申塔の周辺から球磨川の岸辺あたりまで水田が広がっていたようである。球磨川の河川整備とその後の道路建設によって現在のようになったのだという。川瀬と覚井の間には、コンクリート製の川瀬橋が架かっている、自動車で行き来できるようになっている。川瀬橋架橋以前は常設の橋は無く、秋の稲刈り時に合わせて村人が共同で建造する粗末な木橋があるのみで、それも翌年の梅雨時期には球磨川の増水に飲み込まれ流されるのが常で、稲刈り時に新しい木橋を作るのは半ば年中行事であったという。エンブリー写真資料、さらに『須恵村』に掲載されている集落の見取図から推察すると、現在川瀬橋が架かっている場所が、かつて臨時の木橋が架けられた地点であろうことが分かる。エンブリーも調査の行き帰りに木橋を利用していたのか、エンブリー写真資料中にもこの周辺から撮影されたと思われる写真

が多く残っている。写真資料に写された光景と現在を比較すると、旧川瀬橋の存在や、覚井側から球磨川に繋がる道路の変遷、エンブリー調査当時の球磨川利用の実態など、様々なことが分かってくる。戦中～現在までの須恵村の変貌を捉えるためにもエンブリー写真資料は有効である。

川瀬の集落内では、道路の両脇に細い水路が通っているのが印象的である。水路には綺麗な水が流れていて、所々に道路側に少し切れ込んだ箇所があり、その傍らには花を生けた花瓶が置かれていた。住民の方に話を伺うと、そこは食器類など簡単な洗物に使う場所だという。そして生けてある花は、水神さんへの供え物だという。水神さんへの信仰については『須恵村』にも記述があり、エンブリー写真資料の中にも、水神さんに初茄子を供えている様子を写した写真がある。集落内の道路や水路の様子などは変わってしまったが、生活内におけるそれらの利用や神々への信仰などは、現在でも継続している部分もあり、住民の方に対する聞き取り調査は、エンブリーの見た須恵村の姿を復原するために重要な作業となるだろう。

最後に平山を踏査した。平山は『須恵村』の中で「山の部落」に分類されていて、「どの部落からも一番に離れている。(中略)農業に従事する家族はずっと以前から定住しているが、山仕事に従事するのは他の地方から移住してきたもの」と書かれている〔エンブリー 1978 : 37〕。集落の中を阿蘇川が流れ、「山の部落」ではあるものの稲作がおこなわれてきた。一方、「山の部落ではきのこや蜂蜜が取られ、炭焼きもまた副業として木材の伐採をする」〔エンブリー 1978 : 56〕などの山仕事もおこなわれていた。エンブリー写真資料を見ると茶栽培もおこなわれていたようである。すなわち稲作農村と山村の中間的な生活が営まれていた集落である。エンブリー写真資料には、材木の切り出しの様子や、材木の運搬設備・作業小屋などが写っているが、林業の衰退のために現在ではそれらは見られなくなっている。また、エンブリー写真資料に写っている平山の水田は、比較的狭隘で不井然であるが、現在は舗装された道路の両側に地形に沿って綺麗に整備された水田が広がっており、エンブリー滞在当時とは全く異なる景観となっている。これは戦後実施された構造改善事業が大きく影響しているようである。このような林業の衰退や農地の構造改善事業といった戦後の変化が、エンブリー滞在当時、さらには牛島の調査時を経て現在までに住民の生活にどのような影響を与えたかを改めて調査分析する必要がある。

9月16日には、地元の方に聞き取り調査をおこなった。話者のM氏は阿蘇地区(諏訪の原)出身の男性である(調査当時79歳)。昭和11年生まれということで、エンブリー調査当時を経験してはいないが、戦中～戦後に

かけての生活の様子は記憶されていること、また教育委員会に勤められていたことから須恵の歴史や文化に詳しいということで紹介いただいた。

聞き取り調査は、話者と学生がエンブリー写真資料を挟んで向かい合っておこなわれた。学生は最初、事前学習で用意した質問項目に基づきながら質問をおこない、学生の1つの質問に対して話者が1つを答えるというかたちの応答が続いた。しかし聞き取りが進むにつれて、話者自身の経験や知識が話者から積極的に語られるようになった。一例を挙げると、学生の1人は、船の上で洋服姿の男性達と着物姿の女性達が宴会を開いているような写真に関心をもって質問した。すると、その場面が、当時の役場職員達の川遊びの様子であろうこと、撮影場所が覚井の船着き場であろうことなどが分かった。その後、話者の経験から、阿蘇川でナマズやウナギを捕ったこと、イダ(ウグイ)、ハエ(雑魚)、フグラ、アブラメなど魚に関するフォークタム、投網漁のやり方やヨモギを用いて水中眼鏡の曇り留めをしたことなど漁に関する技術、球磨拳のやり方、スルメや冷凍クジラが酒の肴だったこと、阿蘇川の上流には布水の滝があり干ばつの年には滝の前で雨乞い祈願がおこなわれるが、実際には滝の更の上に昇ると小さな祠があることなど、『須恵村』には記述されていない様々な話を聞くことができた。

聞き取り調査では、別の意味で興味深いことも確認できた。学生の1人は、エンブリー写真資料の中の葬儀の様子を写した写真に関心をもち聞き取りに臨んだのだが、エンブリー写真資料に写った葬儀の様子(場所、構造物、儀礼など)について、M氏はほとんど知らず、見たこともないとのことであった。先述したようにM氏は昭和11年生まれで、エンブリー調査当時を経験した訳ではないが、エンブリーが調査を終えて帰国した年に生まれたM氏が、エンブリー写真資料に写った葬儀の様子について殆ど知らないということは、何を意味するのだろうか? 集落間あるいは宗旨の違いによって葬儀の様子が全く異なっていたのだろうか?あるいはエンブリー帰国後、戦中戦後の激動期において、葬儀のおこないの方に急激な変化が起こったのだろうか?あるいはM氏個人の経験の違いによるものなのだろうか?どちらであるかは今後の調査を待つほかないが、であった場合は、エンブリーが著書の中で描いた「須恵村」に、集落ごとの慣習の違いや属人的要因による実践の違いという新たな民族誌的厚みを加えることが可能となり、であった場合にも、牛島の研究にさらなる知見を加えることが可能となるだろう。いずれにせよ聞き取り調査を通じて、エンブリー写真資料から有用な情報を無限に引き出せることが確認できた。

以上、2015年度調査では、エンブリー写真

資料を用いて、写真が撮影された場所の特定、エンブリー調査当時から現在までの須恵の変化、地元の方からの聞き取り調査をおこなった。写真が撮影された場所の特定作業に関しては、エンブリー写真資料のキャプション、『須恵村』の記述、そしてランドマークとなりうる被写体を手がかりにある程度可能であることが分かった。エンブリー調査当時から現在までの須恵の変化に関しても、エンブリー調査当時から80年近く経過、さらにその後の牛島の調査からも30年近くが経過した時点で、変化の実態を改めて検証することは意味のある作業である。エンブリー写真資料を用いた聞き取り調査においても、調査者と話者との対話および話者自身の回想を通じて、調査者の予想を超える様々な情報が得られることが確認された。

一方で課題も明らかとなった。エンブリー写真資料が撮影された場所の特定作業は、土地勘のない外部の調査者には限界がある。またエンブリー写真資料を用いた聞き取り調査に関しても、なるべく多くの方に聞き取り調査をおこなってこそ情報に厚みが出てくる。これらを解決するためには、多くの地元の方に研究に協力してもらうことが必要となる。この時最も重要なのは、地元の方々の主体性であると考えられる。1600枚もの写真資料を用いて「エンブリーが見た須恵村の復原」を実現するためには、長期間にわたる継続的な研究への協力が不可欠となる。行政からの要請を通じた半強制的あるいは消極的な協力では、長続きできないだろう。主体性の有無は、調査を通じて得られる情報の質にも影響してくる。先述したように、写真資料を用いた聞き取り調査においては、調査者からの質問はあくまでも会話の呼び水であり、調査者と話者の対話を通じて話者の眠っている記憶を呼び起こし、情報としてまとめていく。すなわち調査者と話者の共同作業である。その際、話者自身がこうした共同作業を楽しんでいるか、あるいは意義を見いだせるか否かによって、得られる情報の広がりや深みにも自然と差が生じるだろう。地元の方々に主体的に研究に協力してもらう仕組みをいかにして整えるかが今後の大きな課題である。

(2)2016年度

前年度(2015年度)調査を通じて、地元の方々に主体的に研究に協力してもらう仕組みをいかにして整えるかが大きな課題として浮かび上がった。そこで神谷(研究代表者)と武井(研究分担者)が協議した結果、2016年度は調査と並行して、あさぎり町の住民を対象としたシンポジウムを開催することにした。その目的は、本研究プロジェクトの存在と目的を住民に広く知ってもらうこと、これまでの研究成果を地元に戻元すること、そして何よりも、エンブリーの業績の再評価を通じて、エンブリー写真資料の価値やあさぎり町(旧須恵村)がもつ潜在的可能性につい

て住民の方々に再認識してもらうことになった。奇しくも 2016 年はエンブリーの須恵村調査（1935～1936 年）から 80 年の節目にあっていたことも、シンポジウム開催によって時宜を得たことだった。

シンポジウム「エンブリーと須恵村は今エンブリー来日 80 周年記念シンポジウム」は 2016 年 12 月 17 日に、あさぎり町須恵文化ホールを会場としておこなわれた。基調講演 1 本、個別発表 2 本、総合討論が組まれた。シンポジウムには、全京秀（韓国国立ソウル大学名誉教授）、神谷智昭（琉球大学法文学部准教授）、武井弘一（琉球大学法文学部准教授）、久保田順氏（郷土史家）、田中一彦氏（エンブリー研究者）が参加した。

全京秀ソウル大学名誉教授は、「『須恵村』とエンブリー：未来のための鏡」という題目で基調講演をおこなった。全京秀名誉教授は講演の中で、エンブリーがどのような人物であったかについて、彼の学問的背景と業績について資料を整理して提示した。また、エンブリーが記した『Suye mura』が、人類学史上どのような位置を占めているのか、エンブリーがこの著作を執筆するために 1 年間家族とともに須恵村に居住した当時、日本の学界はどのような状況であり、日本の学界はエンブリーの『Suye mura』についてどのような反応と評価をしたのかについて説明した。そして最後に、現在、エンブリーと『Suye mura』に関して議論する理由はなんであろうかと問いかけ、エンブリーの『Suye mura』がまさに現在の「須恵村のための鏡」であること、そして須恵村が「人類学へ向かうアジアの挑戦」の出発点となりうることなどを訴えた。

武井弘一准教授は、「エンブリーはどんな時代に来日したのか？」という題目で個別発表をおこなった。発表の中で武井准教授は、エンブリーが来日した 80 年前の日本および人吉・球磨がどういう時代であったかを示し、そうした時代背景の中でなぜ須恵村が調査地として選ばれたのかを説明した。また人吉・球磨地域の新聞資料や出版物を丹念に調べ上げ、エンブリーの須恵村調査に人吉・球磨の在野の研究者がいかにして協力していたか、特に郷土史家の土肥実雄氏が果たした役割の大きさを明らかにした。そして『須恵村』と須恵の再調査を通じて社会人類学、歴史学（郷土史）、民俗学が協働することによって、新たな研究領域の開拓とより豊かな研究成果が得られる可能性を指摘した。

神谷智昭准教授は、「エンブリーはどんな風景を見ていたのか？」という題目で個別発表をおこなった。発表では、エンブリーが『須恵村』においておこなった須恵村の各部落の分類に基づいて、エンブリー写真資料を整理して提示することで、部落ごとの景観や生業の違いや、エンブリー調査当時の生活の様子などをプロジェクターで映した。また、エンブリー写真資料を用いることで『須恵村』や『須恵村の女たち』の内容をより補強できる

ことを具体例を挙げて示した。さらに学術的観点以外からもエンブリー写真資料の活用方法を考えようと、沖縄県恩納村の取り組みを例に、文化資源を地域興しに活用する方法を紹介した。

個別発表の後は休憩を挟んで、総合討論をおこなった。司会は武井准教授が務め、パネリストとして全京秀名誉教授、神谷准教授、久保田順氏、田中一彦氏が登壇した。田中一彦氏からは、エンブリー研究者としての立場から、基調講演や個別発表に対するコメントをいただいた。さらに今後の調査研究のために、話者の紹介や資料の所在などの情報提供もしていただいた。久保田順氏からは、郷土史家としての知見に基づいたアドバイスいただくと同時に、人吉球磨の郷土研究に携わる者として、本研究プロジェクトの今後に期待するという激励の言葉をいただいた。

シンポジウム当日はあさぎり町内・町外・県外から、合わせて 55 人ももの来場者があり、エンブリーに対する関心の高さが伺えた。パネリストのコメントの後、フロアからも質疑応答を受けたのだが、予定時間を超過するほど多くの方にコメントをいただいた。その内容は様々だったが、父親やおじさんなどから聞いたエンブリーや須恵村に関する話や、自身が幼い頃の須恵村の様子や生活の思い出などを語る方が多かったことは予想外の収穫であった。神谷准教授の発表でエンブリー滞在当時の須恵村の写真を上映際した際も、映像を見ながら、「写ってるのは さんじゃないか？」「この場所は だろう」「昔はこうだったな」といった会話や懐かしそうな笑顔がフロアの各所で見られた。これらのことから、エンブリー写真資料の分析ならびに聞き取り調査を通じてエンブリーの見た須恵村を復原しようとする我々の目的は十分に達成可能だという確信を得た。

一方で新たな課題も見えた。シンポジウム来場者の多くが高齢者で、エンブリーに対する認識や関心が若い世代に受け継がれていないことが見て取れた。また、写真を見て思い出を語っていた人のほとんどが 70 代以上のものであり、その意味では「エンブリーの見た須恵村の復原」実現のための調査時間もそれほど長くは残っていないことも事実である。これらの問題は地元の方々自身も危惧しているようで、フロアからは、自分達の記憶や故郷の文化をいかにして若い世代、特に子供達に伝えていくか考えなければならないという提言もなされた。本プロジェクトとしては、シンポジウム開催を通じて、住民からの地域貢献への期待に応えるという重い宿題を担うこととなった。

(3)2017 年度

前年度開催のシンポジウムにおいて、先達たちの記憶や故郷の文化を子供達に継承していくことの必要性が明らかとなった。そのため 2017 年度は、須恵小学校の学生を対象

に、エンブリー写真資料を用いた模擬授業をおこなった。模擬授業を通じて、小学生にエンブリーや故郷の文化に対する関心を持ってもらうことが目的であった。模擬授業は神谷が担当した。

模擬授業は2017年9月23日、須恵小学校の5年生・6年生20人を対象におこなった。授業は、学生を4班に分け、エンブリー写真資料の中から異なる写真を選んでそれぞれの班に渡し、写真を見て気づいたこと・感じたことを発表するというアクティブ・ラーニング形式ですすめた。写真は、球磨川で野菜を洗っている女性、船上での宴会、洪水時の球磨川、洪水後の復旧の協働作業であったが、学生たちの自由な発想で様々な意見が出された。教室には生徒たちの保護者や地元の老人の方々も来ており、学生たちの意見を聞いて眼を細めていた。その後、神谷から写真の内容について説明をおこなった。現在の小学生は、河川整備事業がおこなわれ洪水がほとんど起きなくなった球磨川しか知らないため、昔の球磨川が家が水没するほどに氾濫したこと、洪水が毎年のように起きていたこと、そうした災害を村人の協力で乗り越えていたことなどを知り驚いていた。エンブリーに関しても関心をもったようで、模擬授業終了後には『須恵村』が学校の図書館に入っているか教師に訪ねる学生もいた。

以上、2017年度の模擬授業は成功のうちに幕を閉じた。今後とも継続していきたい。将来的には、須恵小学校の学生たちも加わるかたちでエンブリー写真資料を用いた聞き取り調査をおこなうことも構想中である。そうすることで世代間交流がすすみ、地域の人々が望む故郷の文化の継承も実現できる。それが研究成果の地域還元の最たるものとなるだろう。

引用文献

牛島盛光 1971『変貌する須恵村 社会文化変化の基礎的研究』ミネルヴァ書房
ジョン・F・エンブリー(植村元覚訳) 1978『日本の村 須恵村』日本経済評論社
ロバート・J・スミス、エラ・ルーリィ・ウィスウェル(河村望、斎藤尚文訳) 1987『須恵村の女たち』御茶の水書房
John f. Embree 1939 Suye mura a:Japanese village University of Chicago Press
Smith, Robert J. and Ella Lury Wiswell 1982 The Women of Sue-Mura 1935-36, University of Chicago Press

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

神谷 智昭(KAMIYA, Tomoaki)
琉球大学法文学部・准教授
研究者番号：90530220

(2)研究分担者

武井 弘一(TAKEI, Koichi)
琉球大学法文学部・准教授
研究者番号：60533198

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

全 京秀(CHUN, Kyung Soo)
田中 一彦(TANAKA, Kazuhiko)
ウィリアム ケリー(William W. Kelly)
山崎 友太(YAMAZAKI, Yuta)
邊土名 美里(HENTONA, Misato)
前城 菜美子(MAESHIRO, Namiko)